楓園

ISSUE 95
2023 1/31

FÛEN［フウエン］
Toyo Eiwa Jogakuin
Public Relations Report

［特集］

Transforming our world

―誰かのためにまず私から―

東洋英和女学院
東洋英和楓の会

Transforming our world

誰かのためにまず私から

創立時より社会問題と向き合い、行動を起こしてきた英和生。
持続可能な世界を目指す SDGs※にも通じる取り組みを 3 つの STORY で紹介。

STORY 1

童謡『赤い靴』と東洋英和の物語

童謡『赤い靴』の女の子と東洋英和のつながり

童謡『赤い靴』に出てくる女の子には、「佐野きみ」という実在のモデルがいる。きみは、東京・麻布にあった東洋英和ゆかりの孤児院「永坂孤女院」で暮らした時期があり、英和生が世話にあたった。

家庭の事情で、幼いころアメリカ人宣教師夫妻の養女となったきみ。帰国命令が出た夫婦と一緒にアメリカに渡る予定だったが、結核にかかり、永坂孤女院に預けられるも九歳で亡くなってしまう。

一方、きみの死を知らず、手放した娘のことをずっと気にかけていた実母。切ない母子の話は人づてに野口雨情の耳に入り、『赤い靴』の基になったといわれている。赤い靴をはいた女の子は横浜から船に乗っておらず、短い生涯を終えていたのだ。

赤い靴　はいてた　女の子
異人さんに　つれられて　行っちゃった
横浜の　埠頭から　汽船に乗って
異人さんに　つれられて　行っちゃった
今では　青い目に　なっちゃって
異人さんの　お国に　いるんだろう
赤い靴　見るたび　考える
異人さんに　逢うたび　考える

童謡『赤い靴』
作詞／野口雨情

山下公園の像が有名だが、1989（平成元）年、孤女院があった麻布十番の一角にも「きみちゃん像」が建てられた。

聖書の言葉

主はあなたの時を堅く支えられる。知恵と知識は救いを豊かに与える。主を畏れることは宝である。

（イザヤ書 第 33 章　6 節）

私たちに与えられた「時」には限りがあります。そして、このような時代だからこそ、人は「本当に価値あるものは何か」と問わずにはいられません。人生を豊かにする知恵と知識は、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって明らかにされました。聖書は、その偉大な御業を成し遂げられた主なる神を畏れ、敬うことから学びが始まることを証します。どのような時であっても「敬神」から隣人を自分のように愛する「奉仕」が生まれるのです。

中高部　聖書科　上野峻一

※SDGsとは

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）とは、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。（外務省HPより抜粋）

恵まれない人のための自主的な奉仕活動 王女会と永坂孤女院

東洋英和女学校が開校して間もなく、生徒自身による宗教活動が盛んになり、今でいう課外活動のようなボランティア団体が生まれた。その中核となったのは、1888（明治21）年に誕生した王女会だ。会のメンバーは、編物や裁縫の作品を販売して社会福祉施設などへの献金に当てるほか、貧困の子どもを救済するため、日曜学校で教師として奉仕していた。さらに王女会の奉仕活動は、小学校に通学できない児童のための私設学校「恵風学校」へと展開していった。

王女会のメンバーは、佐野きみがいた永坂孤女院の運営にも関わっていた。麻布十番に住む子どもの一人が売られてしまうのを知った生徒が、有志を募り、ほかの貧しい子も引き取って孤女院を開設したとされている。一人の子を思う生徒たちの行動が、周囲の生徒、そして大人をも動かしたのだ。

1908（明治41）年の永坂孤女院。1階は日曜学校として利用され、2階は孤児院として利用された。この写真のなかに、佐野きみがいる可能性もある。

創立時より変わらず 社会問題と向き合い続ける 東洋英和の精神

SDGsが叫ばれる現代の社会問題を紐解くと、東洋英和の創設者であるミス・カートメルが抱いていた問題意識との共通点を見出すことができる。

日本で伝道活動をするうち、日本の少女たちは権利や自由を軽視され、学校教育を受けづらいことを知ったミス・カートメル。キリスト教に基づく女子教育を行うことが自分の使命であると考え、1884（明治17）年10月、わずか二人の生徒をもって東洋英和を開校する。

開校当初からキリスト教信仰に基づき、自立した人格として生きる意志と力を持った女性の育成を目的としていた東洋英和。王女会による恵風学校や永坂孤女院のように、より良い社会をつくるために自ら行動を起こし、他者のために愛をもって奉仕する精神は、時代が変わっても英和生に引き継がれている。

マーサ J. カートメル
1845年～1945年
東洋英和女学院の創設者

Contents

表紙写真：英和生の SDGs への取り組み

P.01 ［特集］Transforming our world ―誰かのためにまず私から―

P.09 *From the Garden of Kaede* 楓の園から［学院 NEWS］

P.17 *Cartmell's Prayer*［宗教教育委員会］

P.19 教員紹介

P.21 東洋英和楓の会

「楓園」で掲載している写真には、コロナ禍以前に撮影されたものも含まれています。

試飲したベジャビスタ農園とフェダール農園のコーヒー（高等部・大学連携勉強会）

横浜市役所で小林一美副市長（後列左から２人目、役職は当時）にコーヒープロジェクトの活動や目指すものをプレゼンテーション（大学）

「品質の良い豆とは」「本当のコーヒーのおいしさとは」五感を使って確かめる（高等部・大学連携勉強会）

コーヒーのイメージについてディスカッションする（高等部・大学連携勉強会）

株式会社ミカフェートの方によるサステナブルコーヒーについての講演会（高等部・大学連携勉強会）

ベジャビスタ農園の女性農園主アルマさん（左）と娘さん

コーヒーを飲みながら、味、香りなどをメモしていく（高等部・大学連携勉強会）

▲大学のEiwa Caféパッケージ。「コーヒーの苗を持った生産者とコーヒーカップを持った英和生、両者をEiwa Caféがつなぐ」がコンセプト

▲中高部のEiwa Caféパッケージ。「パナマの子どもたちと英和生がコーヒーと教育でつながる」がコンセプト

クリスマスメッセージを付けたラッピングやポスター作りも行いドリップバッグの販売をお手伝い（小学部）

HISTORY

2018.9
東洋英和女学院大学国際社会学部の授業で、コーヒーを通じた持続可能な社会実現に取り組む株式会社ミカフェートの川島良彰氏の講演を開催。反響を呼ぶ。

2019.5
川島氏の講演に感銘を受けた学生を中心に、13名の初期メンバー・教職員によるコーヒープロジェクトが発足。ミカフェート社の全面協力により活動がスタート。

2019.11
東洋英和オリジナルのドリップバッグコーヒー“Eiwa Café”が完成。コーヒー豆の選定、パッケージデザイン、コンセプト作りなど、すべて学生が主体となって行い、かえで祭で活動報告。

2021.7
高等部の「総合探究」の授業で、大学のコーヒープロジェクトを紹介。大学と中高部の共同プロジェクトが立ち上がり、中高部オリジナルの“Eiwa Café”を製作。

2021.9
丸井グループ主催のSDGsイベント「インクルージョンフェスティバル2021秋」に参加。校外の多くの人に、SDGsや東洋英和の活動の紹介を行う。

STORY 2 学院を縦断するコーヒープロジェクト

一杯のコーヒーから始めるSDGs

東洋英和女学院大学のラーニングコモンズから始まった、「コーヒープロジェクト」。私たちが飲んでいる一杯のコーヒーが生産者の貧困問題や森林伐採による環境破壊など、地球規模の社会課題に関わっていることを伝えている。

活動の柱となるのは、オリジナルドリップバッグコーヒー〝Eiwa Café〟。環境に配慮しながら高品質のコーヒーを生産、女性オーナーの農園の豆を使用している。また〝Eiwa Café〟を広めるためのイベントやチャリティで集まった寄付金は、障がい者の就学・就労支援を行う別の農園に寄付。サステイナブル（持続可能）なコーヒー産業の発展だけでなく、ジェンダー平等、途上国の教育支援など、多方面からSDGsに貢献している。

サステイナブルコーヒーを社会に広く伝える

大学で始まったコーヒープロジェクトは、学院全体に広がりをみせている。高等部の授業で本プロジェクトを取り上げたところ、参加を希望する生徒が現れたことから「高大連携東洋英和コーヒープロジェクト」がスタート。その後、中高部オリジナルの〝Eiwa Café〟が完成。大学のパッケージにメッセージカードを封入する作業を小学部の児童が手伝うなど、本プロジェクトは学院を縦断する活動となりつつある。

2021年9月には、大学、中高部が校外のSDGsイベント「インクルージョンフェスティバル2021秋」に参加。東洋英和のコーヒープロジェクトは、校内に留まらず、校外の多くの人との関わりのなかで成長し続けている。

■STORY2 関連するSDGs

INTERVIEW

大学 人間科学部人間科学科３年
鈴木 胡桃さん

プロジェクトを通してＳＤＧｓが生活の一部に

「コロンビアとつながれる」と書かれていたポスターを見て興味をもったのがきっかけで、プロジェクトに参加するようになりました。それまでは SDGs について知らなかったのですが、今では生活の一部になったと言っても過言ではないくらい欠かせないものとなりました。SDGs は善意で行うことではなく、私たちの社会に本当に必要なことです。SDGs に貢献することが自分自身も幸せになる道であると感じながら、日々活動しています。

社会に広がるコーヒープロジェクト

週一回の定期ミーティングを基本に、現在はかえで祭でのチャリティ・展示や長津田のみどりアートパークでのカフェ出店、パルシステムや無印良品とのコラボなどの準備を進めています。ありがたいことに各所からお声がけいただいており、１年生の時と比べてコーヒープロジェクトがより多くの方に注目され、その広がりを如実に感じ、とても嬉しく思います。その分責任もより感じますが、「コーヒーとともに温かさを届けたい」と強く思うようになりました。

消費者として一度立ち止まる姿勢が身につく

商品の背景を考えたり、「地球のためになるのか」と考えたり。消費者として一度立ち止まる姿勢が身につきました。無理をするのではなく、持続可能なものであるかの観点も重視するように。最近購入したお気に入りの傘は、デザインはもちろん、軽量で機能性も抜群のリペット製品。これもプロジェクトに参加していなければ気づきもしなかったと思います。サステイナブル＝我慢ではなく、楽しくできるサステイナブルな生活を心がけています。

大学 国際社会学部国際社会学科４年
石井 ありすさん

ラーニングコモンズでの出会いから始まる

私とコーヒープロジェクトとの出会いは、何気なく訪れたラーニングコモンズでスタッフの方に声をかけていただいたことから始まりました。当初は学生サポートスタッフである「LC コンシェルジュ」として活動を始め、そこで挑戦する楽しさを感じるようになりました。その後勧めていただいたコーヒープロジェクトにも参加。それまでは授業で SDGs という言葉を知っている程度で、自分がこのような活動に関わるとは思ってもみませんでした。

コーヒー農園の方へビデオレターを作成

参加してすぐに YouTube 配信を担当。知識ゼロの状態から、コーヒーのおいしさに興味を持ってもらうにはどうすればいいのか、試行錯誤しながら配信を行いました。その動画がきっかけで中高部とのつながりが生まれたのは、大きな成果の一つです。2021 年度には、消費者のことを知ってもらうため、生産農家の方々に向けたビデオレターを作成。農園からお礼のビデオレターをいただき、普段つながることのないコロンビアの方々と心を通わせた、とても貴重な経験ができました。

選ぶ目を鍛え、良い物を周囲に伝える

プロジェクトに携わったことで、「何が本当にサステイナブルなんだろう？」と深く考えるようになりました。目の前のことを鵜呑みにするのではなく、本当にその商品はサステイナブルなものなのか、その裏側までも考えるようになりました。本当に良い物を選び、それを伝えていくことは消費者の立場だからできること。選ぶ目を鍛え、自分が良いと感じたものを周りの人に伝えていくことが、今私ができる最大の力ではないかと思っています。

中学部１年
中野 由那さん

世界の問題解決のため小学部からＳＤＧｓを学ぶ

SDGs に興味を持ったきっかけは、海洋汚染やウミガメの絶滅危機、大気汚染などに関するニュースを見たことです。世界には多くの問題があり、解決するにはSDGs の目標を達成しなければならないと学びました。具体的に何をすれば良いか分からないなか、小学部６年の時に授業でコーヒープロジェクトを知りました。ラッピングやメッセージカード、ポスター制作を手伝う形で参加することになり、SDGs を学べると思いました。

農園の子どもたちにチョコレートを送りたい！

コーヒープロジェクトの活動を通して、カカオ農園で働く子どもたちは完成したチョコレートの味を知らないと知りました。私は「チョコレートを味わってほしい」と思い、フェアトレードチョコレートを現地に送ることを思いつきました。小学部の卒業前ということもあり実現しなかったものの、自分たちの創意工夫や行動で、SDGs に関われると気づきました。プロジェクトをお手伝いしたことで、SDGs をより身近な問題として考えられるようになったと思います。

目標達成には一人ひとりの意識が大切

コーヒープロジェクトを通して、SDGs に関する知識の少なさを感じました。SDGs の目標をどうしたら達成できるのか、なるべく早く達成するには何をすれば良いのか、これから勉強をしながら多くの人と考えたいです。SDGs の目標を達成するには、たくさんの人が SDGs について知ることが大事だと思います。一人で考えていても、周りが意識しなければ達成は難しいです。一人ひとりが少しずつ SDGs を意識するだけで、大きな成果が生み出されると信じています。

高等部２年
今野 満理子さん

研究活動の一環としてプロジェクトへ参加

コーヒープロジェクトを知ったのは、高等部１年の時。「総合探究」の授業で、先生からプロジェクトの存在を教えてもらいました。授業では、グループごとに「児童労働」や「環境問題」など関心のある社会問題を選びます。そして、SDGs のどの目標に関わっているかを考え、解決のためにどうすれば良いかを研究します。研究テーマを決める時にプロジェクトの話を聞き、研究活動や SDGs への意識を高めることにつながると思い、参加しました。

「教育」がテーマのコーヒーを企画・販売

プロジェクトでは、中高部オリジナルのサステイナブルコーヒーを作りました。テーマは「教育」。教育や修学支援に力を入れている３つの農園の豆の中から、試飲会を経て使用する豆を選びました。豆選びで意識したのは、おいしさはもちろん中高生でも飲みやすいかどうかです。最終的に各農園の活動内容とコーヒーの味を総合的に判断して決定。自分たちで商品を作り販売する点におもしろさを感じ、翌年もプロジェクトに参加しようと決めました。

フェアトレードが子どもたちの支援につながる

プロジェクトで学んだのは、フェアトレード商品の購入が教育支援や児童労働の状況改善につながることです。自分でもフェアトレードについて調べ、コンビニエンスストアをはじめ身近なコミュニティで公正に取引された商品が手に入ると知りました。今では、お店にフェアトレード商品があるかを気にするようにしています。今後も SDGs について学び、どのような問題があるかを知りたいです。学校で行われる有志活動にも積極的に参加してみようと思います。

■STORY3 関連するSDGs

STORY 3

「食」を通して社会と関わる

自分たちの足元から「食」を見つめなおす

食品ロスの問題が叫ばれる以前から、東洋英和では、日々の生活のなかで食育を行ってきた。

大切にしているのは、一人ひとりが自分事として食べ物の大切さや食糧問題を考えること。知識の一方的な押し付けではなく、さまざまな体験を通して食物、食文化について学ぶ機会を設けている。

小学部での田植えを体験。稲刈りも行う

かえで幼稚園

遊びの一環として コンポストを利用

十数年前から、園内にある小さな畑の脇にコンポストを設置。料理のままごと遊びで使った野菜の切れ端を、遊びの一環として子ども自身がコンポストに入れている。また、できた〝たい肥〟は畑に戻し、食料廃棄物を循環させ資源に変えている。

小学部

給食の時間を使って 食材の生産者と産地を知る

食材の産地を示す地図の展示や栄養士によるおかずの説明など、主に給食の時間を食育に活用。校庭の梅の実を使ったジュースづくり、そら豆の皮むき、田植えなど、体験学習を通じて食材の背景に目を向け、食べ物に感謝する気持ちを養っている。

中高部

廃棄されるバナナの茎を使った バナナペーパーに着目

生徒会活動の一環として、SDGsの認知度を上げるマスク用シールを製作。エコ素材や環境に配慮した製造法は、17あるSDGsの目標すべてを達成している。この活動をきっかけに、教職員の名刺や学校案内にバナナペーパーを採用する動きも進んでいる。

大　学

あまった食品を寄付する 自治体と協働する フードドライブ

10月16日(日)に開催された緑区民まつりでは、食品ロス問題の説明などを学生たちが担当。写真中央は、山中竹春横浜市長

大学の所在地である横浜市緑区と連携・協力し、地域に貢献するさまざまなプロジェクトを実施。使い切れない未使用の食品を回収し、フードバンクや地域の福祉施設に寄付するフードドライブへの参加など、地域住民とともにSDGsを推進している。

Transforming our world

誰かのために
まず私から

INTERVIEW

［大学と SDGs］

学びとＳＤＧｓを結び付けることで継続的な活動へと昇華させる

大学は問題解決のための素地を身につける場所

本学の特色の一つとして、社会のあらゆる場面に対しての問題解決を目指して取り組む「リベラルアーツ教育」があります。学生が学ぶのは机上の空論ではなく、どんな分野でも活躍できる基盤を身につけること。大学という場所は、学生と社会とをつなぐ一つの場所であるとともに、家庭や友人たち、プライベートの世界と公的な世界をつなぐ場所でもあることは、教えるうえで強く意識している点でもあります。学生生活のなかで好きを見つけるきっかけをどうするか、その背中を押せるのが大学の授業やプロジェクトなのではないかと思っています。

PROFILE

人間科学部人間科学科

尾崎 博美准教授

東北大学大学院教育学研究科博士課程修了 博士（教育学）。研究テーマは教育目的論、教育関係論、ケアリング論。2016 年度より東洋英和女学院大学、同大学院に奉職。学部では教職に関する科目も担当。

協同性のなかでこそ生まれる学び

東洋英和女学院の建学の精神である『敬神奉仕』を実現する場として誕生したラーニングコモンズは、協同性の中で新しく生まれていく学びを実践する場として、学部や学科、学年などに関わらず全学に向けた共同プロジェクトの場として活用されています。そこでの取り組みの一つがＳＤＧｓです。ＳＤＧｓはさまざまな問題が複合的に絡み合っているもので、どこか一つの分野だけに注力しても解決しえない問題ばかりです。そこで必要となってくるのが、リベラルアーツ的な学びであり、かつ地球規模の問題に対していかに我がこととして考えられるかという視点。学生たちに身近な世界と国際社会的な問題を結び付けてもらうため、コーヒープロジェクトや横浜市緑区との連携、防災教育など、さまざまな切り口でのプロジェクトを用意しています。

学校の垣根を超えて広がる取り組み

「一杯のコーヒーから始めるＳＤＧｓ」は、プロジェクトの始まりも学生のやりたいという声から始まりました。コーヒー豆の選定や、コーヒーパッケージのデザイン、寄付金の送り先もすべて学生主導。コーヒーを一つのツールとして、貧困の撲滅やジェンダー平等、つくる責任つかう責任など、複合的な開発目標に取り組むことができています。この取り組みは大学だけでなく、中高部や小学部との連携も始まり、幼稚園から大学院までである英和だからこその影響力といえるでしょう。学生たちは、自分たちが計画したことを実現できたことで自信をつけ、さらに次の行動に踏み出すことができます。また、与えられたものに対しての批判的思考の意識も育ってきたと感じます。そんな学生たちの成長を日々たくましく感じながらも、活動が一過性のものとならないよう、大学で学んでいることとＳＤＧｓを結びつけるような機会を今後も提供していきたいと思っています。

From the Garden of Kaede

▲▶取材の様子　聞き洩らしのないようメモを取るのも必死です。グループごとに異なる取材先へ

高２総合探究

長崎× SDGs
～サステイナブルな街づくりを考える～

◀▲シーボルト記念館や亀山社中記念館など記念館を訪問したグループは展示品も見せていただきました

修学旅行での取材活動からオリジナル新聞作りへ

総合探究委員　英語科　武井 有紗

2022年度の高2の総合探究の活動では「長崎×SDGs～サステイナブルな街づくりを考える～」というテーマで、半年間かけてグループごとにオリジナルの新聞を作成しました。具体的には、次のようなステップで活動しました。

1. テーマの決定・事前準備

①キリスト教、②世界遺産、③産業（地形）、④平和、⑤歴史の5つからそれぞれ関心があるテーマを選び、7、8人で1グループに。新聞の作り方を長崎新聞社作成の動画を観て学び、長崎で聞きたいこと、知りたいことをまとめました。取材先にご挨拶のメールをお送りし、いざ修学旅行に出発です！

長崎新聞社作成の動画を観て取材の仕方や新聞作成の手順を学ぶ

Slopeersの学生とのオンラインワークショップ

2. 修学旅行での取材活動

長崎修学旅行の初日に、あらかじめ決めてあった取材先にグループごとに向かい、取材をしました。また新聞に掲載する写真も撮影させていただきました。準備してきた質問だけでなく、新たに生じた疑問にも丁寧に答えてくださり、とても貴重な時間となりました。

3. 長崎大学の学生とのオンラインワークショップ

東京に戻ってから取材してきた内容をまとめ、長崎大学の学生NPO・Slopeersの学生さんとオンラインでのワークショップを行いました。長崎に住む学生の視点から気づいたことをアドバイスしていただいたり、インパクトのある見出しについて考える時間を持ちました。

4. 新聞の作成

いよいよ新聞記事にまとめていきます。メイン記事と2つのサブ記事で1枚の紙面を構成します。限られた字数にまとめたり、読み手をひきつける見出しや写真を選ぶことの難しさを実感しました。記事と写真のデータを長崎新聞社に送り、夏休み中に紙面にまとめていただきました。

新聞作りの様子

5. プレゼンテーションとふりかえり

完成した新聞をもとに、グループごとの発表会を行いました。テーマを選んだ理由や3つの記事の流れ、自分たちの新聞を通して伝えたいメッセージをぎゅっと凝縮したプレゼンとなりました。その後、各自で半年間の活動をふりかえる時間を持ちました。

現地取材では「現地の方にお話を伺って初めて知ったことも沢山あり、ネットの情報だけでは判断しきれないことやネットに載っていなかったことを沢山知れてとても面白かった」、新聞記事作成に関しては「文字数にあわせて構成することが難しかった。事実と主張を区別して書くことを意識した」「記事を作成するということは、沢山ある伝えたいことの中から本当に重要な部分だけをピックアップする必要があったためその部分が難しかったが、みんなで協力して良い記事が書けたと思う」といった感想が出ました。コロナ禍でも修学旅行中に直接お話を伺う機会を快く作ってくださった長崎の皆さんに感謝するとともに、この活動での「気づき」を他者のために行動することができる英和生としての成長へとつなげていってほしいと思います。

上／完成した新聞が届いたときは感無量でした！
下／完成した新聞をもとにプレゼンテーションを行っている様子

防災×SDGs＝外国人住民への防災情報の発信

国際社会学部 国際社会学科教授
桜井 愛子

国際社会学科の桜井ゼミでは、「地に足つけて地球を考える」をモットーに社会科学の視点からSDGsへの理解を深めています。昨今では多くの企業がSDGsに取り組み、製品や企業広告などにもSDGsのロゴが多く見られるようになりましたが、ゼミでは実際に学生が自分の選んだ企業の「サステナビリティ・レポート」を読み、経営戦略におけるSDGsの位置付けや、事業活動とSDGsとの関連付けの程度等を調べ、企業による取り組みの本気度を調べています。桜井ゼミでは、また、2021年度から大学が連携協定を結ぶ横浜市緑区の総務課危機管理・地域防災担当と連携し、外国人住民に向けた防災情報の発信に取り組んでいます。

横浜市緑区の外国人住民の特徴

大学の所在する横浜市緑区には、2022年5月現在、4,472名の外国人が居住しています。外国人人口の割合は、緑区全人口の約2.4%。横浜市全体の約4%と比べるとその割合は決して高くはありません。しかし、その数は2015年同月比（2,898名）で約1.5倍に増加しています。緑区の国別外国人住民をみると、インドが27・8%と最多で次いで中国（22・8%）となっています。横浜市全体ではインド人の割合は2.9%であるのに対し、緑区ではインド人の割合が顕著に高いことが特徴です。さらに、2015年と比較するとインド人人口が2.6倍に増加している以上に、ミャンマー人13・3倍、ネパール人5.2倍、ベトナム人4.0倍と、東南・南アジア系人口の増加が著しく、多様な出身国の外国人が緑区に居住しています。こうした事情を踏まえて、外国人住民の方への防災情報を発信し、「誰一人取り残されない」防災の実現を目指しています。

「やさしい日本語」の活用

2021年度はゼミナールの3年生が、緑区の防災マップを通じて緑区の災害リスクを理解し、どのような情報をどの言語で発信することが外国人住民にとって役に立つのか、検討を行いました。当初、緑区からは「防災マップ」を英語化してはどうか、と相談を受けましたが、緑区での外国人住民の窓口となる組織である「みどり国際交流ラウンジ」とも相談し、「やさしい日本語」を用いることとなりました。「やさしい日本語」とは普通の日本語よりも簡単で外国人にも分かりやすい日本語で、阪神・淡路大震災を機に開発・普及され、現在では観光客に向けた日本語案内、医療現場など多様な場で活用されています。ゼミ生が防災マップを実際に読んでみたところ、「重要なことは分かるがあまりに多くの情報が掲載されすぎていて、マップ上で何層にも重なる情報を読み解き、十分理解することが日本人の私でも難しかった」との気づきが得られたことから、ガイドの内容を何度も検討し、最終的には地震のとき、大雨のとき「あなたとあなたの家族を守るために」どうしたらよいかについての情報を中心に、自宅周辺の避難所の探し方を示しています。ガイドは、「やさしい日本語」により漢字にはルビが振られ、文節の切れ目ごとに余白を設けて分かち書きにして意味が伝わりやすくするなど、工夫されています。

ガイド表紙

完成したガイドを用いた外国人との交流

2021年度の3年ゼミ生が中心となって作成されたガイドのドラフトは、日本語教室で学ぶ外国人住民の方からのフィードバックもいただき、2022年度に完成しました。2022年度は4年ゼミ生から3年ゼミ生へとガイドブックが引き継がれ、大学の留学生や近隣の外国人住民に対するワークショップを通じてさらなる防災情報の発信を行っています。「誰一人取り残されない」社会の実現が近づくよう、英和生と地域の外国人の皆さんとの交流が進められています。

2022年12月10日、15名のインド人家族とガイドを用いた防災ワークショップを行いました

英和の森を守り継ぐために

国際社会学部 国際コミュニケーション学科教授
望月 克哉

横浜校地の周辺は、その多様な植生が人びとの暮らしと調和した里山として知られ、「市民の森」として、その保全と利活用が図られてきました。横浜校地開設にあたり、横浜市との間で協定が結ばれ、大学キャンパスの木々も守られることになったのです。

キャンパスの建設時に植栽された木々も育ち、春の桜花は言うに及ばず、新緑や紅葉のシーズンにも見事な景色を見せてくれます。この英和の森を歩くガイドとして重宝しているのが、生涯学習センターのプログラム受講者により作成された「私たちの学内名木20選」です。手書きのマップに「名木」の所在が記されており、選に漏れた10種とも合わせて、この森の豊かさ、多様性が一目で見て取れます。

このプログラムを指導した中池敏之先生は、学部の非常勤講師として博物館学の教鞭も執られた方です。名誉教授の川崎末美先生と共に、『英和の森の植物たち：感じる、遊ぶ、食べる』（2012年）という出版物も上梓されています。中池先生が描かれた英和の植物のイラストはとても美しく、キャンパスを散策して花や子実を見つける悦びを教えてくれました。

森の魅力は学外にも発信されています。本誌でも紹介されたことがある英和の森の自然あそび「もりっこ」は、横浜市の「みどりアップ計画」の一環となり「よこはま森の楽校」としても知られるようになりました。さらなる森の楽しみづくりとして、「わくわく造形あそび」（注）が加わったことも付け加えておきましょう。

しかし2022年、こんな英和の森には異変が目立ちました。その1つが全国的にも拡がった「ナラ枯れ」で、森林病害虫であるカシノナガキクイムシが媒介する菌によるものです。ナラ、シイ、カシなど、いわゆるドングリのなる木々が、地中から水を吸い上げる機能を阻害され、立ち枯れてしまいます。学生や教職員の目につくものだけでも、正門脇、チャペル向かいなどの見事な木々が褐変し、やむなく切り倒されました。

病害虫による枯死は、決して珍しいことではありません。以前にも、大きく育ったサトウカエデがカミキリムシによる被害で弱り、暴風で倒れてしまいました。気になるのは「犯人」が外来生物である可能性が払拭できないことです。保育子ども学科の山下久美先生も「チャペル週報」（No・2022-21）に書かれていましたが、キャンパスでよく見かけるゴマダラカミキリの在来種による被害とばかりは言い切れないようです。

植生に見られる異変は、生態系の変化とも無関係ではありません。

根方を伐採し、切り株には感染防止のため燻蒸が施された／画像提供：石井造園（株）

高所作業で枯れた枝や幹を伐採した上、重機で降ろす／画像提供：石井造園（株）

次の夏、かつては西南日本にしかいなかったクマゼミの声が英和の森に響かないとも限らないのです。しのびよる影に目をつぶり、耳をふさいでいるうちに、それまで保たれていた自然のバランスが崩れ、元には戻せない状態になってしまうかもしれません。すでに英和の森の様相には、危険な兆候が窺えると言っておきましょう。

上述した中池先生は、常々、英和の森を守る意義を語り、そのために「森林憲章」を制定することを勧めてくださいました。憲章というと大袈裟な感じなので、守るべき「おきて」を定めること、と言い換えましょう。冒頭でふれた「市民の森」にならえば、保全の原則と利活用のルールを制定することになりますが、それでも他人事と感じる向きはあるでしょう。敢えて流行のフレーズを用いるなら、英和の森の持続可能性を謳うことが求められているのです。

英和の森に生じている異変を座視することなく、これを見据えて対処すること。そのためには、何よりも近くで見守ることから始めてもよいのではないでしょうか。

（注）
令和4年度 市民が森に関わるきっかけづくり事業 森の楽しみづくり「ようこそ英和の森へ！緑いっぱい🍁わくわく造形あそび」

小学部とSDGs

小学部教諭　馬渕 智子
小学部教諭　髙田 直樹

小学部とSDGsの関係は、日々の学びの中でごく自然に培われてきました。また、コロナ禍の中、確かに私たちは不安や怖れに押しつぶされそうになりましたが、同時に今まで当たり前に思っていた豊かな物資、学びの機会、そして健康で安心して生活することの有難さや喜びに、改めて気づけたといえます。それこそが、「真の豊かさ」への主体的な気づきであり、SDGsへの意識改革の一歩となりました。

食育

学年やその年によって特徴的な体験をします。2年生の焼き芋体験では、自分たちが掘ったさつまいもを、校庭の枯れ葉（時には子どもたちが休み時間に拾い集めるお手伝いをしてくれます）を利用して行います。銀紙で包んださつまいもを枯れ葉の中に投げ入れ、できあがったホクホクの焼き芋をお友だちみんなと食べるとき、自然の恵みやお手伝いしてくださった用務員の方々への感謝の声が聞こえてきます。1年生はそら豆の、2年生はとうもろこしの皮むきを体験し、児童が給食でいただきました。体験をした子どもたちの誇らしげな笑顔が忘れられません。5年生は初めて田植えと稲刈りを体験（神奈川県足柄上郡大井町にて）し、日本の農業、食はもちろんのこと、携わる人々への感謝について学びました。田植えの後の給食では、一粒残さずごはんを食べるようになり、意識の変化も見られました。

校庭の枯れ葉で作る焼き芋はやさしい味でした

むいてもむいてもまだ終わらない！
茹でたとうもろこしは、ほんのり甘い味でした

小さいかご活動

小さいかご活動とは、敬神奉仕の具現化（隣人について考え、学ぶ。行いをもって、隣人への愛を示す）を目指して毎年各学年で行っている活動です。

1年生は手話を体験しています。聞こえないこととは？から始まり、実際に簡単な手話もやってみました。耳が聞こえない人とのコミュニケーションには、手話だけではなく、「お手伝いしましょうか」「私にできることはありますか」などの、さりげない心配り、優しい心遣いが大切だと教えていただきました。お互いを思いやることは、毎日のお友だちとのコミュニケーションにもつながる、大切な学びとなりました。

初めての手話。優しい心遣いを学びました。お友だちとも仲よくできるかな

4年生は東京オリンピック・パラリンピックに携わっていらした卒業生の早川優子さんをお招きし、多様性について学びました。また、パラリンピック卓球の岩淵幸洋選手（東京パラリンピックでは旗手を務めました）や、陸上メダリストの永尾由美選手をお招きし、講演と交流を行いました。「Share Your Light ～あなたはきっとだれかの光だ～」という言葉が印象的で、子どもたちの心に光を射してくれました。

強くて輝いていて、すてきだった

2021年は、大学の企画したコーヒープロジェクトに、小学部で何ができるかを検討し、6年生でカード作成、コーヒーのラッピング、

その後6年生有志でポスター作成し、小学部内でのワンコイン販売を5、6年生対象に2日間行いました。2022年度もこのコーヒープロジェクトに参加する予定です。

（馬渕 智子）

6年生は、2022年10月にアサヒ飲料の方々をお招きしてSDGsの出張授業を経験しました。各国の子どもたちの水に対する価値観の違いに、多くの子どもたちは驚いていました。オレンジジュースを使ったろ過実験などを通じて、水の大切さを改めて学びました。また、11月には、卒業生で長く国連で活動されている丸田容子さんをお迎えして、講演をしていただきました。世界に約7億人いる貧困者の7割が女性であること、1日に妊娠や出産が原因で800人もの人が亡くなっていることなどに加え、世界には貧困や戦争などの他にも、ジェンダーが理由で起きている課題がたくさんあります。それらを解決し、より良い世界を創るためにUN Women（国連女性機関）で10年間奉職し、今も日本を拠点に活動されている丸田さんのお話に、子どもたちは大変興味深く聞き入っていました。

私たち、水を大切にします！

世界が抱えている課題、国連で働くことになった経緯、仕事の内容、ご自身の学生時代の経験をお話してくださる中で、決して身近とは言えない、「国連」という世界の舞台で働くことが、小学部の先輩が語る言葉によって、少しずつ身近になっていくようでした。

最後に、「大人になった際に目の当たりにするであろう、ジェンダーのステレオタイプやガラスの天井といった障壁に負けずに、女性であることに誇りを持って強く生きてほしい。1つでもいいから、これなら私は誰にも負けないというものを見つけて自信にしてほしい」という素敵なメッセージをいただきました。「今、みんながいる東洋英和はグローバルな人材を育てるための好条件が揃っている教育機関なのですよ」との励ましの言葉で講演は終わりましたが、国連で働くことはもちろん、どのように自分の夢を目標にしていくのかなど、有意義な質疑の機会を得ることができました。国際的な舞台で聖書の言葉を実践されている丸田さんの生き方に触れた、子どもたちのこれからが楽しみです。（髙田 直樹）

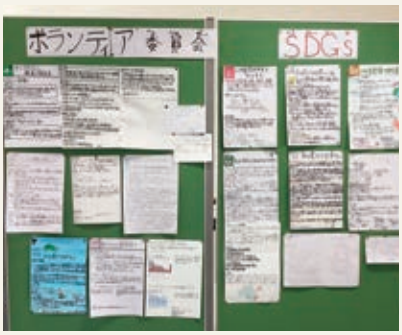
6年生は医療従事者の方たちへ感謝の気持ちを込めて手作りのティッシュボックスを贈りました

「これなら私は誰にも負けないというものを見つけて自信にしてほしい」（丸田容子さん）

委員会

委員会活動を通して、リサイクルボックス（学級）、ペットボトルキャップ集め、給食ゴミのかさ減らしなどが毎年行われています。2022年度はボランティア委員会が、SDGsについて全校への呼びかけを行ってくれました。

一つずつ丁寧にたたんで、給食ゴミのかさを減らします



SDGs～わたしたちにできること～

パートナーシップ

5、6年生は韓国の梨花女子大学附属初等学校（Ewha）との国際交流を長く続けており、よいパートナーシップを築いています。

このように、小学部ではSDGsは学校生活と共にあり、子どもたちは感謝を軸に、平和で豊かな生活へ向かって日々歩んでいます。

物を大切にする心を子どもたちと共に

担任　宮坂 里奈

暑さが少しずつ和らいで園庭の金木犀が香り、秋の訪れを感じる頃のことでした。砂場で掘った大きな穴に、橋のように梯子を渡そうとした年長組の子どもが、「あれ、梯子が壊れている」と言いました。その梯子は数年前に子どもたちが木材で手作りした6段梯子で、それぞれの段の板に6か所ほど釘が打ってあります。よく見てみると、3段目の1本の釘が板から飛び出て抜けかかっており、残りの5本の釘も釘穴が緩くなって板が外れそうでした。近くにいた教師と一緒に木工をするコーナーまで運び、地面にそっと梯子を置きました。すると、周りにいた年長組の子どもたちも2、3人やってきて、「他のところはどうだろう」「あ、ここも釘がとれそうだから修理しよう」と梯子をじっくりと見て、触って点検しました。「どうやって修理しましょうか」と教師が聞いてみると、「釘抜きで抜いて、新しい釘を打ち直すのがいいかもしれない」ということになりました。

ところが、板から飛び出て抜けかかった1本の釘は、錆びついて硬くなり、2、3人の子どもたちが釘抜きで抜こうとしても全く抜くことができませんでした。残りの釘は釘穴が緩くなっていたこともあり、板を持ち上げただけで簡単に抜けました。「このまま打ってもまた壊れて危ないね」「それなら、新しい木を付け直すことにしよう」と子どもたちは相談しました。そして、梯子の厚さに近い木材を大工室から見つけ出し、鋸で梯子の3段目の板と同じ長さに切り、ヤスリをかけました。修理の工程が増えたことで、子どもたちは長い木材を切ることや木目にそってヤスリをかけると木材がざらつかないことに気付いて楽しんでいる様子でした。さらに切った板に絵の具とニスを塗って、乾くのを待ちました。最後は乾いた板を梯子に釘打ちし、2、3日かけてその修理は終わりました。今でもその梯子は、砂場の穴に渡したり、桃の木や高いところに上りたい時に立てかけて使っています。

どうやって修理しようかな

私のお父さんが着ていたYシャツかもしれない

このような子どもたちとの修理のやり取りは遊びの中で日常的に起こります。庭の遊びで使っている木の梯子や机は、卒業した子どもたちが手作りしたものが多く、何年も大切に使っています。長く使っていると、釘穴が緩くなったり、木が朽ちてしまったりします。その他の玩具や楽器も長年大切に使っていますが、壊れてしまうことがあります。安全面を考慮して教師が修理することもありますが、子どもたちとどうやって直せるか・どうしたら壊れずに使うことができるかを一緒に考えます。不用なものをすぐに捨てるのではなく、自分たちで修理し、工夫して使うように心掛けています。

その役目を終えた物の次の使い道を考え、幼稚園の遊びや生活の中で生かすこともあります。お父様が着なくなった古いYシャツの後ろ側を前にして、背中の方でボタンをとめると、子どもたちの膝あたりまで覆われた大きなスモックになります。そのスモックを着て、絵の具やフィンガーペイントを楽しみます。

その他にも、幼稚園の教材室には、牛乳瓶の紙の丸い蓋・使い古した台所の大鍋・プリン等のプラスチックの容器・お菓子の空き箱・発砲スチロール・段ボール・花束の包み紙などさまざまな物が引き出しの中で出番を待っています。例えば、段ボール箱を切って電車や家にして遊んだり、空き箱やプラスチックの容器の中に石や拾った物を入れて楽器にしたり、穴をあけて虫かごにしたりして使います。一見大人にとっては不用な物も、子どもたちはままごとや制作の材料にしたり、何かに見立てたり、どんな物でも工夫をして、遊びに変えてしまう創造力があります。また、そのような子どもたちの生活を知って、周りの方々が木材や道具、紙を届けてくださることもあります。特に新聞紙は遊びだけではなく、上履きや外履きを持ち帰る時にも活躍します。袋に入れてしまえばすぐに終わる作業ですが、新聞紙に包み輪ゴムで止めるというあまり馴染みのない作業も経験することで、さまざまな使い道に気づくこともあります。

子どもたちは、物を工夫して長く使う生活を経験し、自分が使った物や周りの物を大切にすることを身に着けていきます。たやすく買い替えることができる時代ですが、小さなことでも地球環境の保全に繋がることを心掛けながら過ごしていきたいと考えています。

子どもたちとともに「コンポスト」の意味を考えて

担任 吉岡 智春

かえで幼稚園では、十数年前から園庭の小さな畑の脇にコンポスト（堆肥をつくる容器）が設置されています。

毎年3歳児・4歳児の子どもたちは、5歳児がテラスで本物の台所道具を使って料理をする姿や片付けの様子をよく見て憧れています。2022年4月、5歳児クラスに進級した子どもたちは、その時が来たことを喜んでいました。子どもたちは、家から人参や大根の端っこや果物の皮、キャベツやレタスの外側の葉っぱ、ブロッコリーの茎等を持って来て、まな板の上で包丁を使って切ったり、すり鉢とすりこぎでつぶしたりしてスープやサラダやデザートを作ります。そして遊び終わった後は、使った野菜くずや果物の皮を集め、庭のコンポストに捨てに行きます。そのことは子どもたちにとって、片付けの一部となっています。

畑の世話は5歳児が中心となっているため、毎年3月になると1年生になる子どもから次の5歳児に「畑をよろしくね」と伝えられていました。子どもたちは、保育者と一緒に耕したり、肥料を混ぜたり、畝をつくったりと、季節にあわせての畑仕事をします。じゃがいもやさつまいも、葉ものや豆類、また年によってはトマトやオクラやピーマン等も育てます。育てている野菜が大きくなってくると、「大きくなってる～」「早く食べたいな」と成長を喜び、収穫を楽しみにします。収穫したものを料理して食べられることは嬉しいことで、子どもたちと保育者がともに季節の恵みを感じながら、感謝していただきます。

2022年の秋、5歳児の子どもたちと、これまであたりまえのように片付けの一部としてきた「コンポストに捨てること」について、あらためて考える時をもちました。私は子どもたちに、「なぜテラスで使った野菜くずや果物の皮をコンポストに捨てるのかしら？紙のゴミやティッシュはゴミ箱に捨てるでしょ。コンポストに捨てることとゴミ箱に捨てることとは何が違うのかしら？」と問いかけました。子どもたちは、「うーん」とそれぞれに考えていました。やがて、「その野菜と果物のゴミが土を良い土にするのだと思う」「コンポストの中で小さな生き物たちがはたらくって聞いたことがあるけど……」「良い土ができて、畑で野菜が育つようになるのかなあ？」「小さな生き物たちがその野菜や果物の皮を食べて、うんちをしてそれが栄養になるからだと思う」「野菜と果物の皮には栄養があるからコンポストに捨てて、ティッシュや紙のゴミは栄養にならないからゴミ箱に捨てるのだと思う」「燃やすゴミを減らすためにコンポストに捨てるのかな」等と、自分の考えたことや思ったことを話しはじめました。私は子どもたちの考えたことを聞きとめ、それから「そうねえ……私が知っていることは、コンポストの中で、小さな生き物が働いて、野菜や果物の皮を腐らせて、それが栄養になって土にしみこみ、やがて良い土にしていくってこと。そして、良い土ができると、野菜や果物が育てられて、私たちがそれをおいしく食べられるのね」と伝えました。子どもたちは真剣なまなざしで「うん、うん」と頷いていました。私は、「みんながお家から持ってくる野菜くずが、私たちに料理を楽しませてくれて、それからコンポストに捨てられて、土の栄養になり、また野菜を育てるって、ずっとつながっていることなのよね。すごいことね」とことばを加えました。

代々ずっと継承され、子どもたちが習慣にしていたことの意味を、あらためて考え合えたひとときでした。なんとなくわかっていた子どもたちもいましたが、この時に「なぜなのか？」を考え、「不思議だなあ」と思い、「そうなのか」と受け止めた子どもたちもいました。

これからも子どもたちとともに、いのちの一巡や、いのちのつながり、環境を大切にすることを感じながら、この活動をくらしの一部として続けていきたいと思います。

コンポストに野菜くずを捨てる子どもたち

テラスでままごとをする子ども

大学・大学院のキリスト教教育

神と人とを愛し、感謝に生きる強くて優しい学生の育成をめざして

創立以来、東洋英和女学院が大事にしてきたキリスト教教育。
前号の中高部に続き、今号では大学・大学院のキリスト教教育と活動をご紹介します。

日々の礼拝

2022 年度より、対面礼拝を再開

大学のキリスト教教育の根底を支えるものとして、礼拝が大切に守られています。コロナ禍により 2020 年度・2021 年度は完全オンライン、2022 年度より対面とオンラインを併用したハイブリッド型で礼拝を行ってきました。説教･奏楽･動画編集･週報短文執筆･礼拝堂の環境整備を教職員が役割分担し、2022 年度からは学生による奏楽も再開しました。学生が礼拝を通して神様や聖書の言葉と出会い、自分自身と向き合ったり、不安定な日々の中でホッとできる、そのような時間を過ごしてもらいたいとの祈りと願いも込められています。また、礼拝後やその他の時間で伊勢田学院宗教部長主催の「カートメル・カフェ」が開かれ、礼拝のこと、キリスト教のこと、日常のことを気軽に話せる場を対面やオンラインで設けています。

礼拝奏楽を担当する学生オルガニストの養成も行っています

学生による賛美礼拝が行われることもあります

特別礼拝

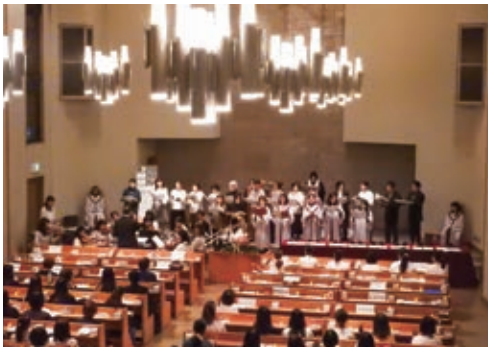
日常の礼拝以外にも大学ではさまざまな礼拝が行われています。4月のイースター礼拝、11月の学院創立記念礼拝にアドヴェント点灯式、12月のクリスマス礼拝、3月の卒業礼拝などです。学生は出席者としてのみではなく、時には賛美奉献・聖書朗読・ページェント・装飾などの奉仕者としても関わりを持ちます。このことがキリスト教に触れる良い機会にもなっています。コロナ禍においても状況を見極めつつ、「学生が携わる」ということを大切にしながら企画・実施がされています。

イースター礼拝のあとにはイースターエッグをプレゼント

2021年度はオンラインで学院創立記念礼拝を実施（2022年度は対面で実施）

アドヴェント点灯式での学生によるページェント

クリスマスの時期にキャンパスを彩るリースやクランツは学院同窓生作


コロナ禍以前、多くの出席者が礼拝堂に集ったクリスマス礼拝

授業におけるキリスト教教育

必修科目の「キリスト教概論Ⅰ」は1年生、「キリスト教概論Ⅱ」は2年生が受講します。大学で初めてキリスト教に触れる学生が多く、「キリスト教概論Ⅰ」では、キリスト教とはなにかを聖書を中心に学びます。実際に御言葉に触れる昼休みの礼拝に出席することを奨めています。「キリスト教概論Ⅱ」では、東洋英和女学院の「敬神奉仕」すなわち、「神を愛し、隣人を愛する」をテーマに、キリスト教の倫理観を学び、これからの自分の生き方を問い、考える機会を提供しています。この他にも「キリスト教思想史」「キリスト教と平和」「キリスト教保育」「キリスト教人間形成論」など、各自の関心や目指す分野によって選択できる科目があります。

上／オンライン授業「キリスト教概論」の一コマ。大学で初めてキリスト教に触れる学生がいることも意識した授業内容
右／対面授業「キリスト教思想史」の一コマ。「キリスト教思想史に見られるエコロジーとフェミニズム」がテーマ

大学院でのキリスト教教育

大学院でも入学式・学位授与式を礼拝形式で行っています。キリスト教関連科目も開講されています。「キリスト教思想特論」を受講した2名の院生の言葉を紹介します。「大学院でキリスト教を学ぶことは国際社会における世界平和など現代のさまざまな問題を解決する、新たな価値や多様な視座を与えてくれる。」「16世紀に当時の権威に立ち向かった女性宗教改革者グルムバッハについて学び、自分の研究テーマと重ね考えることにより思考が深まるものを感じ、興奮した。大学院のキリスト教の学びから、「本当の勉学の面白さ」に気づかされた経験となった。」授業ではディスカッションを通して、キリスト教思想への理解をより深めています。

キリスト教形式で行われる入学式・学位授与式

Aiko Sakurai
Yumi Hiratai

持続可能な世界を求める社会科学者たち

大学

国際社会学部
国際社会学科
桜井 愛子 教授（写真左）
「災害にレジリエントな学校づくり」をテーマに日本や世界各地の学校と地域連携のあり方を研究中。学術博士（神戸大）。

国際社会学部
国際コミュニケーション学科
平体 由美 教授（写真右）
20世紀初頭アメリカ南部の公衆衛生対策を研究中。学術博士（国際基督教大）。

―『社会科学からみるSDGs』（小鳥遊書房、2022）を執筆・出版することになった発端は何ですか？

新型コロナウイルス感染症の拡大、ウクライナでの戦争等によりヒトやモノの流れが制限され世界的な危機が影響を及ぼす中、SDGsへの理解を通じて今こそ世界を近く感じてほしいと考え、本学の先生方からのご協力をいただきこの一冊を書くことが決まりました。経済活動と人間社会、そして地球環境という持続可能な開発を支える3つの側面から、直面するグローバルな課題を構造的に理解できるよう、社会学、政治学、経済学、歴史学など社会科学の専門家が身近な課題を例に平易な文章で解説しています。加えて、本学とSDGsを通じてすでに協力関係にある学院高等部、日本サステイナブルコーヒー協会、横浜市水道局等にも寄稿をお願いし、パートナーシップを通じたSDGsの実践についても紹介しています（桜井）。

―SDGsの推進には何が必要と思いますか？

日本ではSDGsといえば環境保全とエコを意味すると思われています。しかし、SDGsの目標を一つ一つ見ていけばわかる通り、そこには教育改善や貧困対策、消費者としての意識改革、ジェンダーの考え方の再検討など、社会の幅広い課題が網羅されています。そして、それらはすべてつながっているのです。私たちはまず、個人と世界が、また地域社会と国際社会がつながっていることの想像力を醸成しなければなりません。そこに働くのが「誰一人取り残さない」というSDGsの基本理念です。SDGsは非現実的な夢物語を書いたもの、などとよく批判されています。自己責任論にとらわれているとそう見えますね。しかし、弱者の切り捨ては回りまわって強者と思っている人を脅かし、地球環境まで変容させます。まずはそのあたりを知ることから始めていきたいと思います。（平体）

―本学院で学ぶ児童・生徒・学生に一言お願いします。

SDGsの理念は、大学の英和スピリッツ「誰かのために、まず私から始めましょう」に共鳴します。コーヒー一杯、チョコレート一個を、どれを選ぼうというような身近なところから、SDGsを推進することができます。具体的な行動のヒントはこの1冊に沢山書かれています。（平体）（桜井）

▶▶▶ 学生からのメッセージ

国際社会学部
国際コミュニケーション学科3年
（左）岡本 菜奈さん
国際社会学部
国際社会学科3年
（右）井上 優香さん

この本を通じ、持続可能な将来を実現するために私たちが行動を起こす必要性を学びました。コーヒーのサプライチェーンや気候変動がコーヒーの生産に与える影響を学ぶことで、日本の消費者である私たちがコーヒー産地や生産者を知り、産地を支える活動を行っているコーヒーを選んで買うことが大切であることに気づきました。

Arisa Ueda

学校図書館は英和生の知の拠点

中学部

植田 亜里沙
司書教諭

慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻卒業。国語科教諭として5年間勤務したのち、2018年東洋英和女学院中高部に着任。司書教諭として学校図書館運営を担当する他、進路指導委員会などを担当。図書活動委員会、放送部の顧問を務める。2021年9月、2030SDGsゲーム公認ファシリテーターとなる。

—司書教諭を目指したきっかけは？

高校時代に図書委員会で行った国立国会図書館見学です。先人の築いた知の偉大さ、知を蓄積し社会に活かすことの意義を強く感じ、図書館で働きたいと考えるようになりました。大学では図書館・情報学を専攻しました。学校図書館の居場所機能について深く学ぶ中で、子どもの学校生活に寄り添いながらより良い図書館環境を作りたいと思うようになり、志望を司書教諭に絞りました。

着任後最初の始業礼拝で年間聖句（ヨハネによる福音書8章32節）との関わりから国立国会図書館の「真理がわれらを自由にする」が紹介された時には、自分の歩みが思い出されました。さまざまな方にいただいた「神様に選ばれた」という言葉の意味を思うとともに、初心を忘れずにいようと強く感じた瞬間です。

—英和生の良いところとは？

英和生の豊かな発想力と表現力にはいつも驚かされます。進路指導の一環で実施する「本のキャッチコピー大会」では毎回魅力的な作品が多く集まります。また、図書活動委員会で新たな企画や広報のアイデアが次々と出され、委員同士でブラッシュアップさせていく様子をいつも頼もしく感じています。顧問として一つでも多くの案が実現できるよう支援していきたいです。

—2030SDGsゲーム公認ファシリテーターとなった経緯は？

高1総合探究でのカードゲーム実施に向け理科の牧野美穂子先生と英語科の武井有紗先生が既に公認を受けており、3人目として声がかかりました。総合探究の文献活用ガイダンスを担当する中でSDGsに興味を持ち、生徒の探究を後押しできるよう学びを深めたいと思っていたタイミングだったため、喜んで引き受けました。講座や試験の準備は大変でしたが、非常に実り多い時間となりました。公認をきっかけに他のファシリテーターのサポートでワークショップに携わる機会もでき、自分の世界の広がりを実感しています。

SDGsの中では12「つくる責任つかう責任」に最も関心があります。今年度のオープンスクールの体験学習「本の帯でエコしおりを作ろう」もこの目標から着想を得ました。

—英和生へメッセージを！

さまざまなことが簡単に検索できる今だからこそ、時間をかけて考えること、検証しながら丁寧に調べることを大切にしてほしいと思います。皆さんの学びと成長を支え後押しする知の拠点として、今後も学校図書館をより良いものにしていくので、ぜひ積極的に利用してくださいね。

図書活動委員会で国際子ども図書館へ見学に行きました。

▶▶▶ 生徒からのメッセージ

中学部3年
川島 千穂さん

植田先生には図書活動委員会でお世話になっています。先生は私たちの「やりたい」という気持ちを何よりも優先してくださいます。いつも私たちの計画を尊重しながら大人目線でサポートしてくださり、先日も委員が提案した校外の図書館見学会を実現できました。そして、振る舞いが素敵です。一緒にいるだけで私も素敵になれそうな気がします。

英和生の活躍、ご紹介します！

ナイス！ リカバリーショット

2021年夏 霞ヶ関カントリー倶楽部で開催された東京オリンピックゴルフ競技。ティーグランドからグリーンに向かって進む選手と共に彼女はいました。IGF（国際ゴルフ連盟）よりナショナルテクニカルオフィシャル（NTO）に指名されたのです。全世界から選んだ40名の内の一人です。各選手のスコアを正確に全世界にリアルタイムで発信すると共に、プレーを見守りトラブル時には本部と連絡を取るなど、語学が堪能でないとできない役目です。男子7月29日、女子8月4日スタートの猛暑の中での8日間、過酷な任務でしたが、2日目は春にマスターズに優勝した松山英樹選手にもつき、深い感銘を覚えた経験だったそうです。

三木 智映子

1998年東洋英和女学院大学卒。4年次と卒業後に渡米しプロゴルファーを目指す。
不慮の事故に遭遇しプロへの道が閉ざされ、ティーチングプロに転向。日米両国のA級ライセンスを取得。東京オリンピックゴルフ競技のテクニカルオフィシャルに指名される。イタリア料理店も経営する、2児の母。

彼女はUSLPGA（全米女子プロゴルフ協会）とJLPGA（日本女子プロゴルフ協会）の両方のA級ライセンスを持つ、ティーチングプロなのです。

筑波大学附属小中高を卒業後、東洋英和女学院大学に入学。中高では硬式テニス部で活躍し優秀な成績を残し、大学でもテニスで活躍……と誰もが想定していましたが、テニスコートの隣のゴルフ練習場で、可愛い二段スカートのウェアと、練習に精を出す素敵な先輩方の姿に惹かれ、即ゴルフ部へと変更。監督は小川晴也氏、オーストラリア合宿もあり、華やかなクラブ活動であったようです。

大学2年の時、練習のし過ぎで肋骨の7番目を疲労骨折します。一から体を作り直した方が良いと考え、大学4年時に休学して渡米。フィジカルトレーナーに付き、体を支える体力や、正確に遠くに飛ばす筋力を徹底的に鍛え直すと共に、アーニー・エルスやニック・ファルドらを指導し、一流のゴルファーの育成に力を発揮しているデビッド・レッドベター氏のゴルフアカデミーでレッスンを受けます。同時にカレッジのゴルフ専科に通学し、芝やゴルフカートの修理の仕方についても学ぶ機会を得ます。

その後帰国し、4年次に復学と同時にゴルフ部へ復帰。渡米の効果が早速発揮され、春季と秋季の大会で個人優勝メダリストに輝きます。それは、プロゴルファーを目指す決意に繋がりました。

卒業後再び渡米。USLPGAの下部組織でのミニツアーで全米の各地を回り、QT（クォリファイングトーナメント）での合格を目指します。その時が技術的にも精神的にもゴルフ競技者としてピークであった、と言って良いかも知れません。ベストであったその時、テスト会場に向かう空港でゴルフバッグの盗難に遭遇。短距離走の選手が下駄を履いて試合に挑むような状況に追い込まれました。カリフォルニアに置いてあった別のクラブを取り寄せ、試合に臨みましたが合格に至りません。さらにその後、ミニツアー会場に向かう際、交通事故にも遭遇。ゴルファーの心臓部とも言える左手損傷によりツアープロを目指す道が閉ざされます。しかし、ゴルフを愛してきた熱い想いは、ティーチングプロへの夢を描かせ、その道を歩む力となるのです。

2003年、USLPGAのティーチングプロの資格を獲得します。日本人では3人目でした。ところがその後まもなくして、母親の体調不良という連絡を受け帰国となり、日本でJLPGAのティーチングプロ資格取得を目指すことになりました。想定外でしたが、常にベストを尽くすことを心掛けてきたことで養われた底力は、A級取得最後のチャンスに全力で挑む力に昇華し、念願の合格の栄冠を得たのです。そうしてUSLPGAとJLPGAの両方のA級ライセンスを持つ、世界で唯一の日本人となります。

日米ではティーチングの仕方が少し異なる点がありますが、それは両方の良さを取り入れて教えることができる醍醐味でもあります。また米国では、身長や体重、筋力や性格などの個性の違いを生かした指導法を身に付けて来たので、ゴルフ指導だけでなく、継承することになった家業のレストラン経営の人材育成の場でも生かせています。

（文：編集部）

英和生集まれ！

Maple Mall

油絵のオーダーメイドペット絵画

HARUIRO atelier

柴田 真由子（2011年高等部卒）

Data

URL
https://mayukoharuiro.wixsite.com/home

E-mail
mayuko.haruiro@gmail.com

Check!
メールでお写真をお送りいただき、わんちゃんやねこちゃんの性格や思い出をお伺いしながら、ご希望に添えるよう心を込めて制作いたします。お花などを背景に描画することも可能です。お気軽にご相談ください。

ハワイ島大自然の中のロハスでエコな癒しの宿

HAWAII MAKOA ハワイマコア

倉田 郁子（1979年高等部卒）

Data

住所
アメリカ、ハワイ島　P.O.Box 143, PAPAALOA, HAWAII 96780, U.S.A.

TEL
＋1-808-854-1289

URL
https://hawaii-makoa.com/

Check!
目の前に 180 度以上広がる大海原、そこから昇る朝陽。薪で焚く露天風呂から眺める満天の星空。ロバ、羊、山羊、うさぎ、ヒヨコなどの動物たちや大自然に癒され、都会とは全く違う時間の流れを感じてみませんか！

湘南・江の島　海辺のフォトスタジオ

スタジオカノン・バイ・ザ・シー

浅井 加奈（旧姓吉原 1987年中学部卒）

Data

住所
神奈川県藤沢市
片瀬海岸 1-12-17
江の島ビュータワー 10F

TEL
0466-52-7316

URL
https://photo-kanon.com/

Check!
江の島の海の目の前　湘南ビーチサイド
「日常を特別な時間に」 記憶を彩る海辺のフォトスタジオ
フォトウェディング・七五三・成人式撮影など出張撮影も行ってます。

食を通じて文化を創るお手伝い

中国料理 新橋亭（しんきょうてい）

呉 祥慶（1975年東洋英和幼稚園卒）、呉 祥維（1990年東洋英和幼稚園卒）、呉 祥英（1992年高等部卒、1996年大学卒）

Data

住所
東京都港区新橋 2-4-2

TEL
03-3580-2211

URL
https://www.shinkyotei.com/

Check!
創業昭和 21 年。本場の味と心を込めたおもてなしで各界要人よりご愛顧いただいています。個室での同窓会、接待、法事等、ご家族ご友人との気軽なお食事も大歓迎です。
楓祭の懐かしい桃まんじゅうも変わらずございます♪

たくさんのサプリメントよりひと匙のハチミツ

株式会社ビー・サーキュレーション

上野 尚子（旧姓中川 1987年高等部卒）、上野 泰子（2017年高等部卒）

Data

住所
港区麻布十番 2-21-6-1904

Instagram
Bee Circulation Honey

Check!
葉山の里山で非加熱・無添加のハチミツを作っています。
採れたての貴重な生ハチミツをホテル・オークラ東京ロビー階のオーキッド内シェフズガーデンにて販売しております。

英和生が営んでいるお店の情報をお寄せください！

「美味しいスイーツのお店を営んでいます」「地域に根差したクリニックを開いています」「おしゃれなファッションのお店をオープンしました」などなど、英和生が営んでいたり、経営に携わっているお店などの情報をお寄せください。皆様から寄せられた情報で、Maple Mall の誌面を賑やかに彩りましょう。

情報提供は、koho@toyoeiwa.ac.jpまでお願いします。

史料室レター 34

カナダで花開く英和の桜
―「桜プロジェクト」の今―

満開の桜―掲載の画像は、カナダのハミルトン市ダンダスにあるセンテニアルパークに植樹された「桜プロジェクト」による桜の木です。

「桜プロジェクト」は、東洋英和女学院創立百二十五周年記念に『カナダ婦人宣教師物語』が刊行されたのを機に、2011年2月、同窓生を中心としてスタートしました。ミス・カートメルをはじめ百数十人もの婦人宣教師の信仰とお働きが今日の学院の礎となったことを覚え、ミス・カートメルの母教会があるハミルトン市およびミス・カートメルの出身地であるソロルド市に桜をお贈りし、感謝と友好の絆を永く記念していくことを目指しました。

3年間の準備期間を経て2014年6月に学院関係者も出席して植樹式が執り行われました。2019年には「植樹五周年記念ツアー」も開催、両市を再訪しカナダの方々との交流を深めました。

植樹の手配にはじまり現地で桜を見守り続けてくださっているカナダ合同教会引退牧師の有賀誠一先生からは毎年欠かさず桜の報告が届きます。近年ではSNSの普及により、現地の市民の方から東洋英和への「Thank you!」がアップされることも。桜の花を通じて、これからもずっと、カナダと東洋英和とのつながりを忘れずにいたいものです。

2022年5月7日頃に満開となったカナダのハミルトン市ダンダスにあるセンテニアルパークの桜

●「史料室だより」No.99「特集1：親族に語り継がれる柳原白蓮―武田資子氏インタビュー―」
「特集2：村岡花子記念講座を振り返る」は、下記のURLもしくは右のQRコードからお読みいただけます。
https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/
● 史料室 TEL：03-3583-3166／FAX：03-3583-3329　URL https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/

後援会より

2022年度後援会役員会・役員懇談会のご報告

後援会長　井上 貴之

去る2022年7月1日（金）、後援会役員会が開催され、役員改選（案）、2021年度収支決算、2022年度収支予算（案）のご承認を賜りました。役員会に先立ち行われた学院各部説明会では各部の現状について学院よりご説明いただき、役員会後は各部毎の顔合わせ会場に移動し先生方との懇談を行いました。また、10月7日（金）には後援会役員懇談会が開催され、役員と学院との間で活発な意見交換が行われ、大変有意義な会となりました。

2022年度後援会常任役員

大学同窓会 楓美会より

楓美会は2023年に創立30周年を迎えます

楓美会は母校の歴史を学び、英和の未来を見据えて、礎を築いてくださった宣教師の先生方の教えを大切にしています。その一つが周年行事に対する考え方です。5年ごとの周年行事を大切に考え、卒業生や学生の活躍等を外部にも知っていただける機会とし、広報にも活用して参ります。また、港区や各大使館と連携し、地域の皆様に楽しみながら学んでいただける講座を企画していく予定です。詳細は楓美会のHPをご覧ください。

※『東洋英和女学院 資料集 第3号』のブラックモア先生の記述には5年ごとに周年行事を行っていく方針が書かれています。

楓美会創立30周年記念ロゴマーク

学院同窓会より

同窓会 クリスマス礼拝

2022年度はクリスマス礼拝の説教者として副院長の髙橋貞二郎先生をお迎えし、「御子イエスを心に迎える」という題でみ言葉を取り次いでいただきました。この3年間、皆で集うことは許されず配信での礼拝となりましたが、海外にお住まいの方、ご闘病中の方ともご一緒に礼拝を守ることができたことは感謝でございます。六本木の街も変貌を遂げていますが、同窓会は、長い間卒業生が大切に守ってきた「敬神奉仕」の教えを大切に、神様に祈り、人に寄り添う同窓会でありたいと思っております。

髙橋 貞二郎 副院長

東洋英和女学院 学院報・東洋英和楓の会 会報　楓園　第95号　発行日：2023年1月31日
発行：学校法人 東洋英和女学院　東京都港区六本木5-14-40　Tel：03-3583-3325　E-Mail：koho@toyoeiwa.ac.jp　URL：https://www.toyoeiwa.ac.jp